

2022年4月30日/5月1日

聖書箇所： ヤコブの手紙 2章 14-26節

主 題： 「行いを欠く信仰は死んだもの」

行いのない信仰？

結論を言ってしまうえば、ヤコブ書によれば、行いのともなわない信仰はありえなません。行いがなければそれは信仰とは言えないのです。信仰とは、聖書の神を信じていくことです。そのことは 19 節に記されている。「神が唯一である」という言葉は、旧約聖書の本質的な教えです。神を信頼し、そのように生きていくことを信仰と呼んでいます。

行いのない信仰がありえない理由として、そのような信仰は役に立たないからであると言われていています。その役に立たない内容は、困難を経験している人々を助けることができないからとされています。衣食住で困っている人がいたときに、親切な声をかけるだけではその人の必要が満たされるわけではありません。言うだけでは、必要な物資は届きません。届かなければ、下手をするとその人は死んでしまいます。一方、14 節には、行いのない信仰はその人を救わないと言われていています。自分にとっての隣人や、困っている人を助けることができないばかりか、その

人自身を救うこともできないと厳しい言葉で非難されています。行いのない信仰は、他者をもその人をも救うことはできないのです。むしろ、信仰自体が死んでいると言われていています。

信仰と行いを区別する？

18 節の言葉は、少し説明が必要です。新改訳第 3 版では 18 節の最後まで、誰かが実際に述べた言葉として引用符がついています。しかし、この言葉は「私は行いを持っています。」で終わっていると考える方が良いでしょう。「あなたには信仰がある、私には行いがある」とは、ある人には信仰があり、ある人には行いがある、そのような意味で使われています。人によって信仰がある人と信仰とある人がいて、両者は区別されるという考え方です。信仰と行いを分けてしまう発想がここにはありません。しかし、ヤコブ書はそのような考え方に反論します。行いのない信仰があるならば見せてみろと言うのです。信仰自体は信じること、信頼することですからそれ自体を見せることなど不可能でしょう。逆に、行いをもって信仰を見せることができると言います。神に対する信頼は、行いをもってはじめて証明できると言っているのです。



つまり、信仰と行いとを分けるという発想自体が間違っていることになり
ます。

神についての教えを「正しく」理解することは重要でしょう。「正しい」
教えなしでは、やはり間違っただ道に進んでしまいます。でも、その教え
の「正しさ」だけならば、神に敵対する勢力もそのことを知っています。
神への信仰というならば、行いがともなうはずなのです。

他者を救う行い、生き方を変える信仰

ここで考えている行いは、他者との関係に基づいていることを指摘し
ておきましょう。ヤコブ書全体でも行いについて書かれている場合、す
べてとは言いませんが、その多くは他者との関係を考慮することではじ
めて意味のある内容になっています。具体的な例として挙げられている
のは、困難を経験している人々への支援です。まさに、他者との関わり
方が直接的に課題とされているのです。私たちが神を信頼して生きる意
義がここに求められているのです。

もちろんヤコブ書もそうであるが、聖書が述べている
信仰とは、単なる宗教的な信条や信心ではありません。
また、永遠の命の約束の保証という意味だけでもありま



せん。行いが達せられないから信仰の意味が失われるとは言われていま
せん。問題は信仰者としての生き方です。この地上における、その人の
生き方そのものです。信仰は自分が生きていく上で幹あるは土台となる
価値観と言い換えることができます。私たちが日常に暮らしていくこと
とは、何らかの行動をすることです。その行動は自分の価値観に常に裏
打ちされています。私たちの生き方の価値観とその具体的な生き方は直
結することになります。特に重大な決断が迫られたり、誰かから助けを
求められたりするときには、その価値観が言葉や行為となって表れてき
ます。

ヤコブ書は善い行いをしなさいと言っているのではありません。他者
との関わりを神の意志に適ったものにするために、自分の価値観を変え
なさいと言っているのです。イエスはそれを「メタノアイ（回心、悔い
改め）」と言いました。価値観を変えれば、生き方も行動も変わるのです。
この順番は逆ではありません。ヤコブの言葉は痛烈ではあるが、それは
私たちが互いに大切にしていける生き方を私たちが選ぶためです。

来週：分散礼拝 5月7日/8日

聖書箇所：ヤコブの手紙 3:1-12

説教題：「舌の制御」